



Title	抽象論と個別事情の迷路から抜け出す方法 : 「言葉と学知のOS」から考える新しい歴史教育
Author(s)	桃木, 至朗
Citation	大阪大学歴史教育研究会 成果報告書シリーズ. 2021, 18, p. 57-60
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/91435
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

大阪大学歴史教育研究会第 133 回例会[2021 年 3 月 13 日(土)ウェブ開催]

抽象論と個別事情の迷路から抜け出す方法

～「言葉と学知の OS」から考える新しい歴史教育

小林傳司（大阪大学名誉教授、科学技術振興機構社会技術研究開発センター上席フェロー）・
桃木至朗（大阪大学文学研究科教授）

（要旨）近年の改革をめぐる教育現場の議論は、高大どちらを見てもしばしば（人文系では特に？）、「何のための改革か」のような抽象的・一般的な議論と、個々の学校や科目・入試の「現実」しか考えない議論・行動の間で迷路に入り込んでいないだろうか。その背景を探ると、知識と考え方の関係、教科・学問分野ごとの目的・方法の違い、入試の公平性、それらを議論する言語表現等々をめぐる認識がかみ合わないために、改革をめぐる議論の積み重ねを追体験しながら、新しい研修や批判的実践のステップを上がって行くことがうまく出来ないケースがまま見られる。教員などの「専門家」だけでなく、生徒の親などの「一般市民」やマスコミも似たようなものではないか。となるとそれは、歴史教育や教員の養成・研修だけの問題ではなくなる。そこで今回は、中等・高等教育が全体として涵養すべき学問・認識の一般的土台（たとえば大学の教養課程―学部高学年・大学院向けの「高度教養教育」を含む―が扱うべきもの）という角度から、新しい歴史教育のあり方や役割を議論してみたい。回り道のようながそこで頭の整理が出来れば、あちこちに転がっている「コロンブスの卵」が見えるようになり、改革への対処は単純な苦役ではなくなるだろう。

1.（辛口すぎる？）問題意識 [桃木]：中等教育でも大学・アカデミズムでもほぼ同様

*言葉の OS についての [新井紀子 2019] [鳥飼・荻谷・荻谷 2019]、また他山の石としての「古典教育は必要か」論争についての [勝又基編 2019]、近代知との向き合い方についての [荻谷剛 2019] などが喚起する危機感

1.1.改革をめぐる理解や議論が広く共有されない、結果として「一部の先進的な教員」と「その他大勢」との差がどんどん広がる（その中で「戦況」はしだいにガダルカナル化し、また無謀なインパール作戦も行われる）状況への危機感：そうなる理由は「忙しすぎるから」だけではないだろう。

ー現状に危機感を持たず（or 持っても何を考えていいかわからない、もしくは自分にも危機の責任の一端があるとは思えない）、改革や新しい授業・試験を「自分事」だと思わない多数派の教員・研究者。

ーその人々が異口同音に語る(イ)素朴すぎる一元論や二者択一思考にもとづく疑問・違和感 [後掲資料で例示]、そして(ロ)人文学無用論に対する下手な反論の背景にあるのは、(1)「理論や枠組みは自然に存在するかどこか外から（上から）来るもので、理解するより既成の「型」として覚えるものである、自分はその「型」の中で（不都合なものは面従腹背でやり過ごすことを含めて）部分最適解を実現するのが仕事だ」、(2)自分の組織や社会、そのルールには強く自己同化（＝過適応）しなければならない。その外は危険な世界でその人々が言うことには警戒が必要だ、したがって自分の組織のやり方、今までみんなが覚え込んでいたやり方などを下手に変えて失敗するのは最悪の行動である、といった信念（思い込み）ではないか。

ーその自己同化する日本の組織原理（大学人文系で特に顕著）は、「標準的」であることと内部の安定性を重んじ、全体の枠組みを考えたり他組織と連結することが苦手な「似

たり寄ったりの小さな組織の寄せ集め」状態を作り出しがちである→個々の組織が主張する「個性」は、「集権的な巨大組織を振り回す創造的ゲリラ活動」が可能なレベルにはめったに達しない。

- 1,2. こうなる原因として、教職教育や専門教育とは別に広義の教養教育（言葉と学知のOSをインストールする場—それは専門教育の「前」だけで済むとは限らない）で身につけるべきいくつかのトレーニングが不足していないか。

—日本の大学の教養教育で通常提供されているのは、語学や情報処理教育を別とすると、(1)旧教養部以来の個別の学問のさわりを話す概論（マルクス主義亡き後の人文学は特にランダム—「専門基礎科目」ないし学部の概論・入門講義も同じ）と、(2)教養部解体後に増加した史料調査や発表とアカデミックライティングなどのプラクティカルなスキルだけである。「教養教育」に必要なはずだがそこでほとんど提供されていないのは、(3)国際バカロレアで求められるような（ということは高校で可能な or 細かく専門が分かれていない高校でこそ学ぶべき）各分野共通の「学知とは何か」「科学哲学」はもちろんだが、人文社会系では理系全体に対する数学と同じ意味での「大学レベルの言葉と論理の教育」もほぼ皆無とそれを踏まえた各領域や個々の学問の位置づけの理解、(4)それを踏まえた異分野理解や協力と他流試合の訓練等の機会。

—だから教員・研究者の多くがもつ「言葉¹と学知」や「社会」、「学問／教育の自由と責任」などについての基本理解は1980年代水準にとどまる（一部はマルクス主義以前）：たとえば「優秀なワープロ専用機」ないし「MS-DOSで動くPC98」？→すると「歴史（学）は何を何のためにどうする学問か、それは他の教科・科目や学問分野とどこが同じでどこが違うか」は語れない。それで「歴史的思考力とは何か」を語ったり理解することは可能か？

★こうした状態から極端に仕事を増やさずに抜け出す鍵はどこにあるだろうか？

2. 小林報告

3. 教員・研究者向けの課題・例題ないし頭の体操—こういう内容を毎週考え討論・発表する大学の授業（新・人文学研究科の必修科目にしたい）は不可能だろうか、それは高校向けにアレンジできないだろうか→余裕のある参加者は、ここから他科目との相互乗り入れによる探究活動や、授業・試験課題を考えることも出来るはず。

A. ことばのOS

(例題 1) This is a pen.に「これはペンです」以外で4通り以上の和訳を与えよ。

(例題 2) 主語が省略されたり時制をきちんと表現しない日本語、「食堂で料理を注文する際に「僕はウナギだ」などと言ってしまう日本語は論理的ではない、という今でも根絶されていない言説はどこが非論理的か説明せよ。上の言説が日本語を何語と比べているかに注意すること。

(例題 3) 日本語は論理的ではないことを認めたくて、四季に関する繊細な表現、擬声語・擬

¹ 大学レベルの「歴史的思考力」には概念や論理などについて中等教育より高度な言語の理解・運用能力（まずは母語＝日本語の）が必要なことは当然だが、今日の中等・高等教育の課題としてはもうひとつ、「学校文法」などにもとづく高校までの母語話者向け国語教育と、非母語話者向けの日本語教育（大学はもちろん小中高校でも受容が増えている）とで、日本語の説明体系が大きく食い違っている点を教養教育などの場で認識する必要も大きくなっていると考え。それは、歴史学でも問題にされてきた「西洋中心史観を背景とする日本特殊論」が、国語教育でも払拭し切れていない状況など、「世界の中の日本（語）」の見直しにもつながるだろう。

態語の多様な存在、「思う」「想う」「念う」「惟う」など漢字の使い分けなどを根拠に、外国語にない微妙な感性の表現には優れている」という言説も根絶されてはいない。これまた、日本語を何と比べているかにも注意しながらその矛盾や無知を論ぜよ。

(例題 4) 近代以前の日本に科挙試験（四六駢儷体や八股文の答案が必須）がなかったことは日本人の漢字の理解・使用にどんな限界と利点をもたらしたか考えてみよ。

B. 科学性とは何か【ここが一番本質的】

(例題 5) すべての「科学」が数学的に表現できる法則や定理・公式にもとづく「条件が一定ならどんな場合にも、だれがやっても同じ結果が出る唯一の正解」（そこに偶然や個体差、研究者の価値観などは全く作用しない）を追求しているだろうか。そうでない学問分野の例を、高校世界史で習うような理系の主要分野の中から挙げよ。またそこでは、法則や定理の代わりに何が科学性（正しさ）の証明になるかも説明せよ。それらを考える際には、基礎科学と応用科学の区別はもちろんだが、理工系と医歯薬・生命系など分野による違いにも注意すること（マクロ経済学の証明方法も参考になるかもしれない）。

(例題 6) 遅塚忠躬は歴史の法則性を疑い歴史観の主観性を認めつつ、歴史研究（史実の解明と歴史像の提示）の方法論として「資料立脚性と論理整合性の2つが不可欠」としている〔遅塚 2010〕。では歴史学の方法論は、自然科学と共通点を持たないだろうか。資料の性質についての自然科学の一部との共通点、論文の書き方における自然科学一般との共通点などに着目して論ぜよ。

(例題 7) そのような歴史学の「資料立脚性と論理整合性による史実の解明方法」は裁判での犯罪や不法行為に関する事実の証明方法とどこが違うだろうか。何が証明の基準とされるかに着目して説明せよ。

(例題 8) 自然科学や工学・技術系の専門家にも必要な歴史や哲学の素養（知識・考え方）は、科学技術を暴走させないために（過去の成功や失敗の教訓を学ぶために）必要な外在的内容だけだろうか。その分野の理解や思考を深める方法自体に歴史が内在的に関わるような性質をもつ学問領域は存在しないだろうか。環境問題やビッグヒストリーをヒントに考えよ。

C. 学問と社会【生徒・学生の進路選択には 9.10 がきわめて大事。教科・科目としては 11 がカギ】

(例題 9) ある学問や産業が「世の中の役に立つ」というのは、富や便利さを増加させることだけを意味するだろうか。そうでないやり方で「世の中の役に立っている」学問や産業の例を、「人文学など役に立たない」と平気で言うような経済界や理系でも認められている「実用的」諸分野の中から挙げよ。

(例題 10) 逆にそういう人々にとって役に立たない（成果が出ないという意味でなく成果が出ても富や便利さが増加しない）理系の学問の例、一方で世の中に便益や楽しみを与え十分「カネになる」人文系の学問の例を挙げよ。

(例題 11) 「政治性をもたない完全中立の学校教育や学問」は可能かどうか、望ましいかどうかについて議論せよ。18 歳選挙権だけでなく、個々人の自由な（自主的な、自律的な）学びの保障という観点からも考えること。

(例題 12) 狭義の実用性や経済性よりもっと広い意味で、歴史など人文系の教育・研究も「社会の負託」に応えるべきだと考えた場合、これまでの日本の歴史教育・歴史研究の方法や内容構成にはどんな欠点があっただろうか。上の各例題も踏まえつつ自由に論ぜよ。

4. まとめと討論

資料：阪大歴教研が乗り越えてきた（つもりの）「よく聞かれる素朴な疑問」

（生徒・学生とその能力について）

- ・先生方の理想はわかるが、いきなり教育内容や試験のやり方を激変させたら生徒が戸惑う。
- ・思考力などの難しいことを受け付けるのは一部の優秀な生徒だけで、圧倒的多数の中レベル以下の生徒たちは、暗記すら十分できないのだから、そんなことは考えようもない。
- ・子供たちは（しばしば大学生も）抽象的な理屈や概念は受け付けられないので、具体例を学ばせるなかで少しずつ抽象的思考に導くしかない。
- ・子供たちの理解力や思考力はすべて小さな事柄から大きな事柄へと一方向に発展する。

（教育内容・方法や目標について）。

- ・まず基礎知識がなければ考えることもできない。
- ・古典の文句を引用した政治家の演説など、現代社会でも起源や典拠を知らなければ理解できないことがたくさんあるから、近現代史だけでなく古代史から教えなければならない。
- ・知識だけでない思考力や概念を身につけるには、資料を読む中で経験的に発見する方法しかない。
- ・「資料は一次史料に限る」「文章資料は原文（日本史なら古文・擬古文その他）で読ませねば意味がない」。
- ・グローバル人材とは多国籍企業や財界のための考え方である。

（高大それぞれの役割と入試）

- ・中学校で基礎知識をきちんと教えていないから高校が苦勞する。
- ・高校までは基礎知識を教えるので、考え方などは大学で教えればよい。
- ・高校歴史教育は歴史学（＝専門家養成？）の教育ではない。
- ・マークシートや穴埋め方式の試験は短時間で公平な採点ができるが、論述式などは手間がかかるうえに公平な採点が難しいのでとてもできない（どうやったら実現できるか見当がつかない）。無理にやると入試の公平性がそこなわれる。
- ・暗記は貧富の差なくできるし成果は努力に比例する。しかし「思考力」「表現力」などを問われると一部の優等生とそれ以外の差が広がるし、特別な訓練を受けられる恵まれた家庭（高所得の家庭、「文化資本」に恵まれた教育程度の高い家庭）の子供が有利になる。
- ・歴史など人文学は現在を疑う批判精神を養うために学ぶものであるから、「役に立つ」ことや現代的意義を求めるのは間違っている。
- ・概念や大きな像などは解釈が分かれるから、それを教えるのは特定の歴史観の押しつけになる。

参考文献

- 新井紀子 2018.『AI vs 教科書が読めない子どもたち』東洋経済新報社。
- 大阪大学歴史教育研究会（編）2014.『市民のための世界史』大阪大学出版会。
- 勝又基 2019.『古典は本当に必要なのか、否定論者と議論して本気で考えてみた』（文学通信）
- 荻谷剛彦 2019.『迫いついた近代 消えた近代 戦後日本の自己像と教育』岩波書店。
- 遅塚忠躬 2010.『史学概論』東京大学出版会。
- 鳥飼久美子・荻谷夏子・荻谷剛彦 2019.『ことばの教育を問い直す——国語・英語の現在と未来』ちくま新書。[序]
- 桃木至朗 2009.『わかる歴史・面白い歴史・役に立つ歴史—歴史学と歴史教育の再生を目指して』大阪大学出版会。
- Sue Bastin, Julian Kitching, Ric Sims 著、大山智子訳・後藤健夫編 2016.『Theory of Knowledge セオリー・オブ・ナレッジ 世界が認めた「知の理論」』Pearson。